

一、新 丸 御馬廻替々一与 横山大膳与 富田越後守与

一、堂形御藏并御鐵炮藥藏 御馬廻一与替々

一、火本火消 御馬廻替々二与

一、下々火事之砌、所々如御定何も可被罷出候。御馬廻組之儀は与頭中令相談、於所々當番可被相極候事。

一、御城遠、氣遣無之火事之刻は、いづれも被罷出間敷候事。

一、火事之場は親子・兄弟其外一類并家中之者之外、罷出俄堅御停止之事。

付り、火事出来之時、火しづまり候共、其日其夜之内、見舞として火事場の使をも遣之間敷事。

一、火本は、火之番之人持衆并夜廻之衆、猥に立入候もの於有之は、相改擲取可被申候。手向者有之は可爲討捨事。

一、御城内に罷出候侍は、長道具爲持候事有之間敷候。但、火本に罷出候當番之衆は不苦事。

一、人持衆・御馬廻衆・御小姓衆によらず火本近者共は御城

に罷出、火を防可申事肝要事。

一、侍屋敷・町方によらず、火事出来候者、惣町中より水を持寄、一町切に町じるしを爲持、火之番衆に相斷遣し可申事。

付り、町下代罷出、町々の人數可相改候。若不參之町人於有之は、曲言可被仰付事。

右被仰出所如件。

寛永十四年閏三月十四日 横山山城守 本多安房

二二 夫銀・打銀之儀御定

定 百姓中三匁打銀

一、夫銀子如定春夏請取置、拂方一年切に令算用、金銀并帳指上べく事。

一、三匁打銀、拂方一年切に可遂算用事。

一、三匁打銀入申刻者可申聞候。留守中之儀者年寄共申聞、所々奉行入申渡、百姓中可申付候儀、過分之入料有之打銀不足之刻は、急度可申上候。銀子取替可遣之候。追而百姓

中より三匁打銀相調可指上事。  
右定處如件。

寛永十五年六月廿五日 御 印 判

小西太左衛門殿  
正田掃部殿

一、百姓中召仕候諸事入料、打銀を以可下行事。  
右定處如件。

寛永十五年六月廿五日

原田又右衛門殿  
成田 左内殿  
中村新左衛門殿  
田井 主馬殿

二三 往還道橋用水之儀御定

定 往還道橋用水

一、往還橋之材木其外入用、並人足手間料已下、三匁打銀を以可下行事。

一、往還道作候手間料令吟味、打銀を以可相渡事。

一、用水入料、前波加右衛門令吟味可相渡事。

一、入料過分之時、三匁打銀不足之刻は、急度可申上候、銀子取替可被遣候。追而百姓中より可指上候事。

一、夫銀・打銀兩様遣方、四人之内二人宛相替、隔年に可令裁許事。

一、夫銀并打銀拂方、一ヶ年に三度宛相途中勘定、毎度帳面指上可申事。

二四 組頭勤方之儀御定

覺

一、參宮湯治之事、与中書付に与頭奥書仕、安房守・山城守方に渡置可申候。罷歸刻も右之通に可仕事。

一、与中出入之事於有之は、其組頭は不及申、惣与頭中も談合仕、疎略仕間敷事。

一、若近邊火事等有之においては、一与々々寄付、与頭仕城外に道筋を明相詰、因幡守指圖次第城内に可申候。居申候所々、与頭中致相談、所を相定可申事。

一、与中、殺害人はじめ走者追懸申事、与中番を相定、油